

一 次の①～⑤の□に当てはまる言葉を語群から選び、漢字で答えなさい。

- ① 困難な□題に直面する。
② 一人でお□守番をする。
③ 大統領は職□を全うする誠実な人だ。
④ □流で活躍する大谷選手。
⑤ 学級委員に立□補する。

《語群》

カ セキ ル コウ トウ

二 次の①～⑤の□に当てはまる漢字一字を自分で考えて答えなさい。

- ① 信長が天下を□める。
② ようやく環境に□れる。
③ 鳥の鳴き声で目が□める。
④ 白羽の□を立てる。
⑤ 写真は光と陰が□りなす芸術だ。

三 次の文章を読んで後の問いに答えなさい。

① 建築と情報の関係を考えるために、まずは建築と建物を区別してみることから、話を始めたい。

この2つの言葉は字面^{じづら}もよく似ているけれど、私たちはちゃんと使い分けている。たとえば「建築する」とか「建築中である」とは言うけれど、「建物する」とか「建物中」とは決して言わない。

「建物」とは文字どおり「建てられた物」であり、物理的なモノそれ自体のことだ。石や木やコンクリートやガラスなどを組み合わせてつくられたモノそのものであり、重さがあり、体積があり、燃えたり、潰^{つぶ}れたりする。

それに対し、「建築」という言葉はモノそれ自体を指すと同時に、それをつくる行為^{こうい}、つまりコトの意味を含^{ふく}んでいる。「建物」が「建てられたモノ」である、の対比させていうと、「建築」とは「建て築くコト」だ。つまり、モノとしてだけでなく、コトに意味がある場合、「建物」ではなく「建築」という言葉が用いられる。

また、「建物」や「建築」に似た「建」のつく言葉には、他に「建設」「建造」「建立^{けんりゅう}」などがある。ニュアンスの差はあるが、どれも「構造物などを」つくるコトで、モノの意味はない。モノを指すためには、それぞれに「物」をつけて、建設物、建造物、建造物、建造物と言わなければならない。

「建築」という言葉の面白^{おもしろ}さは、それが建てられたモノであり、同時に、建てるというコトである点にある。

建物を建てるという作業を思い浮かべてみてほしい。どんな情景が目に見えようか。長い材木に鉋^{かんな}をかける大工の姿、鉄骨トラスを吊^つり上げるクレーン、それとも生コン車から送り出されるコンクリートを型枠^{かたわく}に注ぎ込むパイプの脈動だろうか。確かにそうした建設現場でのすべての行為が「建てる」というコトであり、その積み重ねによって建物が実現するということは間違^{まちが}いがない。

〈注〉1 鉄骨トラス——地上や地下にしかれたケーブルを防護するもの。

② かしながら、どんなに大量のコンクリートを敷地に運び込んでも、ただ闇雲にぶちまけたのだとしたら、それはただのコンクリートの塊であって、建物と呼ぶことはできない。磨きあげた材木をどんなに揃えても、横たわっている限りはただの材木の束にすぎない。コンクリートの塊や材木の束が、建物になるためには、意味ある位置に、意味ある形で配置され、組み合わせる必要がある。そこに、「建築家」と呼ばれる人たちが登場する。

建築家は、直接自分で建物をつくるわけではない。レンガを積んだり、ノミをふるったりはしない。建築家は、何を、どこに、どんな形で、どんなふうに置くのか、を決めている。つまり、建物のつくり方をつくるのだ。この、「つくり方をつくる」というコトによって、「建てる」コト全体が統御されているからこそ、コンクリートは壁になり、材木は柱になり、建物になることができる。

このことを、ミース・ファン・デル・ローエという建築家は「すべてのものを適切な場所におき、すべてのものにその性質に従った役割を与えることによって、われわれは秩序を持ちうるはずである」と言った。

またミースは「二個の煉瓦を注意深く置くときに、建築が始まる」とした。煉瓦はどうでもよい。二個というのが本質だ。一個ならどう置いてもただの煉瓦だが、二個目を置くときに両者の「関係」が生まれる。

モノとモノの「関係」が「秩序」だてられていること。その関係が社会に開かれ、使い手を迎えるとき「機能」が生まれる。一般に「機能」というものはあらかじめ決まっていると考えてしまいがちだが、それはかならずしも正確ではない。たとえば、住宅の場合、敷地の中にさまざまな大きさの部屋をバラバラに置いて、それぞれに居間や厨房、寝室、書斎などと名前をつけてみたところで、それぞれの部屋がそれぞれの役割をきちんと果たすことができるわけではない。機能もまた、コンクリートや材木と同じように、意味ある位置に、意味ある形で配置され、関係づけられることによって、すなわち秩序だてられることによって初めてあらわれる——機能する——のだ。そして、諸室として機能しうるよう秩序だてられた物体が、エネルギーの流れの場に適切に置かれ、生じる光や熱や風や音の状態が、そこに人間にとって快適な水準で安定していることではじめて、建築が成立する。

そこいらに転がっているコンクリートの塊や材木の束。バラバラに散らばっているさまざまな大きさの部屋。そうした、そのままではわけのわからない複雑で混沌とした状態にある物体と機能に——すなわち「世界」に——秩序を与え、人間にとって了解可能なものにとりまとめることが、建てるというコト、建築というコトなのだ。

③ 「建築とは世界を秩序だてることである」なんて聞くと大げさに感じるが、「建築」をこんなふうにより抽象的な水準で了解しておくことが、建築と「情報」の関係を考えていく上で重要な意味をもってくる。さらに先へ進むことにしよう。

建築家は自分ではつくり方をつくるのだ、と書いた。暗黙の前提がある。「つくり方」はつくる前に「あらかじめ」つけられている、という前提である。当然のように聞こえるかもしれないが、これは決して当然のことではない。

もともと、何であれモノは、それを使いたい人が自分でつくっていた。こんなふうに使いたいというモノのできあがりのイメージは、使用者であり製作者でもある人の頭の中に、ぼんやりとした形である。とはいえモノの加工はイメージどおりに進んだりしない。天然の材料は不均質で癖があつて狂つたり暴れたりする。つくり手はつくりながら、材料のもつ癖にそつてイメージを修正しつつ作業を進める。だいたいできたら、ちよつと試してみる。いまいちだつたら直す。満足なら、すぐに使いはじめるだろう。もつと直したいところがあつても、とりあえず使えるし、こんなもんでいいやと妥協したりしながら。あり合わせの食材で料理をしたり、雪だるまをつくつたりするとき、今もこんな感じだ。その場で器用につくるのだ。

プロセスが場当たりのに見えても、最終的に物体が秩序だてられているから機能する。素朴な物づくりのプロセスにおいては、「つくり方」は「あらかじめ」何かの形で外在的に示されているわけではない。すべてはつくり手の頭の中にあり、つくられていくと同時に修正されていく。それが集団によって行われる場合でも、息が合っているなどと呼ばれるイメージが共有されている状態が前提にある。言葉は知らない。このとき、つくられるモノとそのつくり方は一体である。すなわちモノと情報は不可分だ。

四 次の文章を読んで後の問いに答えなさい。

ト部小春(わたし)は、中学二年生になり、学校で話題の美人である長谷川優貴(長谷川さん)と同じクラスになりました。中学一年の三学期に転入してきたばかりの長谷川さんはなぜかクラスで孤立していましたが、興味を持った「わたし」はそんなことにかまわず、長谷川さんの唯一の友だちとなります。しかし、ちょっとしたすれ違いから、「わたし」が長谷川さんと一緒にいる時間は減り、長谷川さんを良く思っていない望月亞梨紗(亞梨紗)や袴田夢美(ユメちゃん)と一緒にいる時間が増えるようになります。本文はそれに続く場面です。

ふたたび学校がはじまった。

わたしはこれまでどおり、亞梨紗やユメちゃんといっしょにいる。

長谷川さんがときどきこっちを見ている気がするけど、気づかないふりをした。

でも、体育の準備体操のときだけは、そういうわけにはいかない。

先生が合図をするたびにすぐにはかの子たちは二人組になってしまつて、仕方なく長谷川さんのところへ行く。ぎこちなく挨拶を交わして背中合わせのストレッチをはじめ。

「手足、長っ」

「ウエスト細っ」

まわりからささやく声がある。わたしはきこえないふりをして準備体操をつづけた。きっとわたしの体型が、長谷川さんのスタイルのよさをよけいに引き立ててる。

べつに彼女(かのじよ)のことが嫌いになったわけじゃない。

嫌(いや)でたまらないのは、勝手にいろんなものを長谷川さん比べて卑屈(ひくつ)になつてしまふ、自分自身だ。

① 長谷川さんとなんか、友だちにならなければよかった。

② どうしてほかの女の子たちが長谷川さんと仲よくならないのか、いまはわかる。

テレビや雑誌に出ている芸能人やモデルみたいに、ずっと遠い世界の人でいてくれたら、わたしも純粋(じゅんすい)にあこがれていられたのに。やつと準備体操がおわつて先生の話がはじまつた。

前に座(すわ)つた長谷川さんのシャツが上にずれ、腰(こし)のあたりの下着がすこしはみ出ている。ショッキングピンクの派手な下着。体育座りの長谷川さんがひざをかかえると、体操着はさらに上にずりあがる。

これって、教えてあげたほうがいいのかな。のぞいた下着をそばで見ているのも落ちつかなくて、やっぱり教えてあげることにした。

そつと手をのばして体操着の裾(すそ)をくいと引っぱつたとたん。

長谷川さんは、体をびくつとさせてふり向いた。

「なに!？」

とがった声。かたい表情。

「あの、ごめん。ちょっと下着が出てたから」

「ああ、下着……ありがと」

長谷川さんは、はみ出していた下着をさつと短パンの内側に入れる。

長谷川さんが近寄りがたいのは、見た目のせいなんじゃないかと思つてたけど。さっきの彼女はなんだかこわかつた。警戒心(けいかいしん)をみなぎらせたすどい瞳(ひとみ)……。わたしたちが知らないだけで、彼女はほかにも学校では見せていない顔をたくさん持っているのかもしれない。

「長谷川さんがうちのクラスで浮いているのって、見た目のせいじゃないよね」

授業(こうい)のあと、更衣室(こういしつ)で古賀さんと横山さんがしゃべつてた。

「わたしもそう思う。だって亜梨紗なんて、美人だけど女子にも人気あるじゃん？」

「あたしも亜梨紗、綺麗だから大好きっ」

「こらユメちゃん、汗臭いからやめてーっ」

ユメちゃんに抱きつかれたまま、亜梨紗が身をよじる。

「あの人って、表情も話すこともなんか上っ面だけっていうか、本心が読めないんだよね。浮いてるのは性格に原因があるんだって、いかげん気づけよってかんじ」

更衣室に、長谷川さんの姿はない。

みんなはこのときを待っていたかのように、長谷川さんについて思っていたことをぶちまける。

「小春は長谷川さんのこと、どう思う？」

とっさになんて答えていいかわからなくて、首をぶんぶん横に振った。

「まあ、そんなところだよね」

まわりの子たちは、神妙な顔でうなずいている。

次の体育の時間はあつというまにやってきた。

「じゃあ、今度は馬跳び十回ずつ！」

② 二人組の準備体操。長谷川さんはかがみこんだわたしの背中に手をついて、先に十回跳びこえる。次はわたしの番。

数日前にあんなことがあったばかりだから、彼女の体に触れるのはただでさえ気を遣う。それに、背の高い長谷川さんの上を跳びこえるのはけっこうきつい。

「あの、もうすこしがんでくれる？」

二回跳んだところで、お願いした。

「うん」

長谷川さんは体操着の裾をぎゅっと引っぱってから、かがみこむ。

下着がはみ出でないか、気になってるのかな。

もつと姿勢を低くしてほしいんだけど……。

なんとか跳びこえようとして、バランスをくずしてしまった。

わたしは長谷川さんごと砂の上にくるがった。

「大丈夫!？」

駆け寄ってきたまわりの子たちに助け起こされる。

「……うん。長谷川さんは？」

「わたしも平気」

長谷川さんは、髪や体についた砂をはらいながら言った。よかった。顔に傷がついてなくて。

「保健室、行ってきたよ。ケガしてる」

誰かの声。見ると、長谷川さんの脚に血がにじんでいる。

「すぐに連れてく。行こっ、長谷川さん」

わたしは言った。

「このくらいいぜんぜん平気。それより、卜部さんも血が出てる」

そういえば、校庭の砂がめりこんだ手のひらやひざが焼けつくように痛い。

「わたしのことなんか、どうでもいいよ」

連れだって校舎へと向かいながら言った。

「よくない」

長谷川さんはちよつと怒つたように言った。

「だって、わたしのせいで長谷川さんにケガさせたんだもん。顔も体も、大事な商売道具なんですよ？」

長谷川さんは、小さくため息をついて歩きだした。

同じ年なのに、すべてを悟りきつてるような顔。刺のある言葉なんか、まともに相手にしている暇はないって顔をされると、ますますみじめになってくる。

保健室に、先生はいなかった。

「しずかだね」

沈黙に耐えられなくて話しかけた。

窓の外から、ホイッスルの音とみんなの声がきこえてくる。消毒液と薬品のまざったような苦味のあるかおりが、部屋のなかを満たしている。

「卜部さん」

流しの水で傷口を洗っていたら、うしろから声がした。

水を止めてふり向くと、長谷川さんは片脚に血をにじませたまま、うつむいて体操着のウエストのあたりをこそこそとなおしている。

「ちよつと、見てほしいものがあるの」

③ 白シャツがまくりあげられ、その下からあざやかなピンク色の布地が現れた。布は、筒のようにお腹のまわりに巻きついている。

この季節に腹巻き？

彼女は両手で腹巻きを一気にずりあげた。

すこしのあいだ、わたしはそれがなんなのか、わからなかった。

そこにあるのは、胴体しかありえないのに。

彼女の胴体は褐色で、浅くえぐれていた。干からびた水たまりみたいに乾いた肌の上を、極太のミミズのような傷が這っている。左胸のすぐ下あたりからはじまって、右の脇腹までななめにのびた、一本の長い傷痕。

「それ、どうしたの？」

口からしぼりだした声はかすれていた。

「事故に遭って、手術した跡。たぶん一生残ると思う」

「痛くない？」

「ごくたまに違和感はあるけど。何年も前のことだから、もう普段の生活に支障はない。よかったらさわってみる？ 意外に感触いいの。卜部さんにならさわらせてあげる」

おそろおそろ手をのばして肌をなでる。ぽっこりと盛りあがった傷痕はツルンとしている。傷の部分は血色のいい桃色で、そのまわりの肌は砂地みたいにざらついている。地面の上にできたくぼみは目にとまらないのに、お腹にできたくぼみからは、どうして目が離せないんだろう。

胸がドキドキして呼吸が浅くなる。これまでのことを、すべてあやまりたい衝動にかられる。

「めん」

口にしたあとで失言だったと気がついた。けどもう遅い。

「ごめん」

ごめんなんて言って、ごめん。

長谷川さんは、わたしがあやまるたびに首を横に振り、悲しそうに笑った。

その顔は、「きれいだね」って褒められたときに似ている。

ついさっきまで長谷川さんに抱いていた、どす黒いこんがらがった感情は、跡形もなく消え去っている。

お腹にこんな傷があるなんて、まったく気づかなかった。

雑誌に載っていた、向かうところ敵なしってかんじの強気な笑顔が胸に刺さる。

がんばれ。

ストンと、そう思った。

わたしはつくづく単純で、つまらない人間だ。

こんなにひどい傷を見て、また長谷川さんと友だちになりたいと思ってるなんて！

だけど……必死に自分の弱い部分をさらけ出してくれた、彼女の勇氣に^{こた}応えてあげたい。

（河合「湖」向かい風に髪なびかせて」より。）

問一

——線部①（どうしてほかの女の子たちが長谷川さんと仲よくならないのか、いまはわかる）とありますが、みんなが長谷川さんと仲よくならないのはなぜだと「わたし」は考えていますか。25字以上35字以内で説明しなさい。

問二

——線部②（数日前にあんなことがあったばかりだから、彼女の体に触れるのはただでさえ気を遣う）とありますが、「あんなこと」とはどのようなことですか。30字以上40字以内で説明しなさい。

問三

——線部③（この季節に腹巻き？）とありますが、長谷川さんはなんのために季節外れの腹巻きをしているのですか。15字以上20字以内で説明しなさい。

問四

——線部④（必死に自分の弱い部分をさらけ出してくれた、彼女の勇氣に^{こた}応えてあげたい）とありますが、長谷川さんとの関係に対する「わたし」の感情は、何をきっかけにどのように変化したのですか。80字以上90字以内で説明しなさい。

国語試問解答用紙

平成二十九年
中学入試
1 回

受験番号

2

三 二 一

問一

問二

問三

問四

四

問一

問二

問三

問四

①	①
②	②
③	③
④	④
⑤	⑤

85	45	30	40
50	55	60	
75			

90	25	35	80
30	15	20	
40			

号 室
受験番号
氏 名

受験番号は解答用紙の右のらんにも記入しなさい。

--	--	--	--	--	--	--	--